

# 「海の生きものと民俗学」

講師 富士うらら

## ◆内容紹介

イギリスで海洋生物学を学んでいた私は、ずっと、いわゆるサイエンスの分野に大きく偏った関心しかありませんでした。十数年前、和歌山県の南方熊楠記念館で、熊楠が大切にしていたフジツボ標本を目にするまでは……。

南方熊楠は菌類・変形菌（粘菌）の研究者で日本が誇る知の巨人です。幼少期から本草学や百科事典を筆写し、米国・英国に合わせて14年も滞在し帰国後は日本における民俗学研究の先駆者でもありつつ、英国の科学雑誌Natureに51編も寄稿しています。熊楠のフジツボ標本に添えられていた解説文には、晩年熊楠が昭和天皇にご進講（講義）をしたとき、真っ先にこの標本の解説をしたと書かれていました。限られた25分という持ち時間のなか、熊楠の最大の専門分野の粘菌の話差し置いてなぜフジツボが最初の話であったのか、私は気になってしかたがなく、ほどなく民俗学の世界の面白さにすっかり魅了されていきました。科学と他の分野が垣根を越えてつながるとき、その化学反応はとても興味深いということを熊楠のフジツボ標本に教わりました。

当日は科学と民俗学双方の視点から、海の生きものフジツボの歴史をご紹介したいと思います。フジツボと聞くと、岩場や船の底に付着している厄介な「貝」という印象が強いかもしれませんが。実はフジツボはカニやエビと同じ甲殻類に分類されます。ですが外側に“貝”のような石灰質の殻があり、体内には海中のプランクトンを集めるための“鳥の羽根のような外見の脚”をもちます。このためフジツボはガチョウの卵だと考えられていた時期もあり、バーナクル・グース神話という、フジツボが実としてなる木からガチョウが生まれるという神話が合ったほどです。生物の学名の「二名法」をあみだしたカール・フォン・リンネは、この「フジツボの木からガチョウが生まれる」という話を本気で信じていた時期がありました。リンネだけでなく、フジツボの奇怪な構造は、ゲーテをはじめ、ゲスナー、ラマルク、キュビエなど、ヨーロッパの錚々たる博物学者たちの興味をひき、同時に何の仲間にしてよいか悩ませました。そして19世紀の前半までの長い間、貝の仲間分類され続けます。1830年になってようやくフジツボは、エビ・カニ類特有のノープリウス幼生を経ることがわかり、エビやカニと同じ甲殻類と正式に認められます。その後のフジツボ学の基盤をつくったのはチャールズ・ダーウィンです。ダーウィンは8年間もフジツボ研究に没頭し、その過程でダーウィンは生物の進化を確信し「種の起源（進化論）」をまとめあげることに大いに役立ちました。彼の研究は、現代の最先端科学に繋がっています。ダーウィンが発見したフジツボ幼生のセメント腺は、今も世界中で研究が続けられており、人工的にフジツボの接着剤を模したものは、今まさに医療や工業の分野で、水中で物と物をくっつけることができる夢の接着剤として実現されようとしています。

## ◆講師略歴

英国ウェールズ大学バンガー校海洋科学学部海洋生物学科卒業、同大学博士課程中退。東京大学三崎臨海実験所での実験補佐、日本動物学会の職員を経て、海洋生物研究家。

研究分野は付着生物学、博物学、民俗学。

所属団体：海の生き物を守る会（会員）、日本付着生物学会（役員・企画運営委員）、公益財団法人南方熊楠記念館（客員研究員）

◆著書 岩波書店 岩波科学ライブラリー フジツボ 魅惑の足まねき

